【教育振興支援助成報告】

服飾造形パリ短期海外研修プログラムの開発と実施

平成 28（2016）～ 30（2018）年度和洋女子大学教育振興支援助成報告

鬘谷　要、向井加寿子、海老名理紗子、玉利舞花

Planning and execution of Paris short-term overseas study program for fashion and art

KATSURAYA Kaname, MUKAI Kazuko, EBINA Risako, and TAMARI Maika

要旨

2016年度に服飾造形学類短期海外研修プログラムとして、パリのオートクチュール組合の開設した服飾専門学校（Ecole de la Chambre Syndicale de la Coutur）での1週間の集中講義を含む研修旅行を新規に企画・実施した。

企画・準備段階では学校間協定締結、カリキュラムの策定、旅行会社との折衝、事前説明会の開催、実施段階では、学生募集、保護者説明会、事前学習会を経て研修を実施し、さらに帰国後、反省会を行った。本報告では上述の各工程における、取り組み状況と共に、成果および反省を記録することを目的としている。本稿では本学教育振興支援助成を受けた2016年度から2018年度までの３年間の実施状況を報告する。

キーワード：海外研修・overseas study program、サンディカ校・Ecole de la Chambre Syndicale de la Coutur、ファッション・fashion、服飾構成技術・clothing techniques

１．緒言

様々な分野で国際化が加速し、日本の教育界でも小学校での英語教育をはじめ、国際的視野を持つ教育活動が強く求められるようになってきている。国内の大学においても、外国語コミュニケーション能力の強化から、海外留学の機会提供まで、各大学が特徴を打ち出しながら様々な学修企画が設けられている。本学においても海外の多数の教育機関（2019年8月現在12校）との協定を結び、教育研究活動を展開している。

本学では語学や文化を学ぶための、いくつかの海外研修プログラムが企画され実現されてきたが、服飾造形学分野での海外研修については長らく話題に上りながらも、具体的な企画がなされてこなかった。その大きなハードルとして、単なる視察・観光旅行ではなく、現地で授業を受けるための教育機関への伝手がなかった事が挙げられる。また引率教員の引き受け手がなかったことも副因として挙げられる。

一方で、本学は同じ敷地内に併設の高等学校を有しており、これまでファッションテクニクス科と称した服飾系教育課程を擁しており（2019年度で募集停止）、同高校が独自の海外研修プログラムを持っていたこともあって、本学での服飾系海外研修プログラムの設置が求められていた。

和洋女子大学 全学教育センター

そのような背景の中、2015年夏に、当時客員教授であった齋藤統氏から、かねてより打診していた海外での服飾学分野での本格的な研修の企画について具体的な回答を受けることができた。その企画は、パリのオートクチュール組合の開設した服飾専門学校（Ecole de la Chambre Syndicale de la Coutur）（以下、サンディカ校と記す）での本学向けのオリジナルカリキュラムでの集中講義という大変魅力的なものであった。

直ちに具体的検討に入り、まずは先方校との学校間協定を締結し、同時に本学教育振興支援助成に予算を申請し、2016年夏の実施に向け詳細を企画し実施に漕ぎ着けた。本稿では教育振興支援助成を受けて実施した３年間の取り組みと成果について報告する。

２．事前準備

２－１．学校間協定の締結

海外の教育機関と協力して本学の学生への教育プログラムを実施する際、また、その際に単位の認定を伴う場合先方校との提携が前提となる。このため、まずサンディカ校との学校間協定締結を行うこととした。

2015年12月、服部久美子国際交流センター長（当時、現在は本学名誉教授）、国際交流センター、齋藤統客員教授（当時）の協力の下、先方校François Broca校長とMOUの作成に着手し、慎重に文言の検討を行いながら2016年２月に完成した。

MOUの完成を受けて、実際の締結、即ち調印式を先方校（フランス、パリ市）で開催することとなった。本学からは、岸田宏司学長、向井加寿子、髮谷要の３名が渡仏し、齋藤統客員教授のコーディネートの下、岸田学長とBroca校長の調印式が2016年3月1日執り行われ、協定が成立した。

２－２．カリキュラムの検討

当初より、視察や観光ではなく、大学ならではの本格的な教育プログラムの実施を目的としており、カリキュラムの検討は最も重要な事項であった。

まず、研修期間を正味５日間と決め、その中でどのようなカリキュラムを設計し実施するかを検討するため、2016年５月に本学から教員３名が先方校へ赴いた。先方校は校長に加えPatrick教務主任が出席し齋藤客員教授の監修の下、2日間に亘り議論を重ね、ワンピースを題材としてデザイン発想とドレーピングを５日間で実現するためのカリキュラムを作成した。現地での時間が限られるため、課題の一部を事前に本学（日本）で準備することとした。また、最少催行人数を10名とし、実技指導を多く伴うため20名を超えないこととした。

２－３．旅行業者選定

旅行会社の選定は、価格と安全面を重視して行った。本学国際交流センターの協力の下、業者提案を募ったところ、学校での海外研修の取扱実績を持つ旅行業者4社から企画提案に応募の意思が示された。集中講義期間の前後を活用し美術館など審美眼を養うための視察・見学を組み込む設計とし、サンディカ校まで徒歩圏内の宿泊施設を確保出来ることを条件として各社に提示した。

業者選定は担当者での選考会議を経て、国際交流センターに選考過程を説明し承認を得る形で公正に実施した。４社の内１社はホテルの確保が出来ずに辞退し、残る３社の提案から価格が最も低廉でかつ安全面への十分な配慮がなされているベル・ツーリスト社が選定された。国際交流センターの指示により、入

札による業者選定は毎年実施し、都度審査を行い、全ての年度でベル・ツーリスト社が選定された。

教育振興による補助により教員の引率費用の全額に加え、通訳や現地調整費などが補填され、募集価格（個人的な出費以外を含む旅行代金）は43.8 ～ 59.8万円であった。ただし、帰国後全ての経費を精算し、旅行会社の配慮により残金（実施年により3千円から3万円）を返金することが出来た。

２－４．参加者募集

実施内容と価格が決定された段階で、学生に向け募集を開始し、昼休みや放課後を利用して事前説明会を実施した。対象者は本学服飾造形学科（類）に在学する2-4年生とした。事前説明会では「観光目的ではなく真剣に勉強をする意志のある人だけ参加して欲しい」と、本プログラムの目的を明確にして募集を行った。

また、当時の服飾造形学類にとって全く新しい企画であったため、卒業生の参加も可とした。募集期間の前半では申込が少なく成立が心配されたが、初年度は２名の卒業生を含む13名の正式応募があり、実施が決定された。続く2017年度は12名、2018年度は18名の参加があった。学年の内訳は、2016年度は2年生3名、3年生6名、4年生2名、卒業生2名、2017年度は、2年生11名、3年生1名、2018年度は2年生11名、3年生5名、4年生2名であった。

２－５．保護者説明会

実施の決定を受け、国際交流センターの助言を得ながら保護者説明会を実施した。保護者説明会では、研修旅行の行程の詳細、研修内容、安全への配慮、海外旅行への準備などを、旅行会社担当者と共に説明した。ちょうどフランス国内で複数のテロが起こった後であったため、安全面には特に慎重に対応しており、パリの齋藤統客員教授、サンディカ校、旅行会社、外務省からの情報などを基に、治安の悪化など安全上の懸念が増加した場合には、躊躇せず旅行を中止することを伝えた。

保護者説明会では、参加学生とその保護者の連署による誓約書（引率教員の指示に従って、研修に専念する旨）、旅行会社への正式申込書、旅行傷害・賠償責任保険の申込書の提出を求めた。

２－６．事前学習会

初年度（2016年度）は、各自ファッションブランドを1つ選んで、そのブランドのデザインについて情報を収集し分析することがサンディカ校から課題として与えられた。参加学生を土曜日の午後や夏期休暇中に集めて、課題の制作を指導した。この指導には向井があたった。

2017年度は、研修期間にパリ市内で開催されるクリスチャン・ディオール展を研修開始前日に見学することと、併せてディオールの作品について情報の収集と分析が課題として与えられた。また2018年度は同様にマルタン・マルジェラ展の見学と作品分析が課せられた。いずれも初年度同様学生を集めて向井が指導した。

事前指導では課題の主旨と具体的な作業・学修内容の詳説に加え、学生の取り組み結果を確認する点検指導を設けた。点検指導は８月のお盆前であったが、毎年ほぼ全ての学生が出席し非常に熱心な姿勢で個別に指導を受け、このことが後述のアンケートからもサンディカ校での授業を有意義なものにするために非常に重要であったことが示された。

2017年度に参加者のほとんどが2年生であったことで、先方校から渡仏前にドレーピングの基礎を日本で経験させることが提案され、2018年度はドレーピング未経験者向けに、特別に講習会を設け、全て

の未経験者が受講した。

２－７．安全への配慮

2016年度（初年度）の実施に向けて準備を進める中、フランスではパリ市内の新聞社襲撃をはじめ、ニースの花火会場などでのテロが発生しており、実施の決定に極めて慎重な判断が求められた。教育機関での研修旅行では、知識、技術の修得とともに、安全の確保が最重要課題となるため、齋藤客員教授を中心とし情報の収集と分析に全力を挙げた。幸い3年間とも、渡航直前では安全が確保出来ると判断された。

また、治安上の問題など我々の責に帰さない事由により旅行を中止した場合、加入する保険によって支払い済みの旅行代金が返還されること、サンディカ校が治安上の懸念により研修を中止した場合に納付済みの授業料の全学返還を申し出てくれたことは特筆に値する。

３．研修実施

３－１．往路および集中講義前の視察・観光

2016年から2018年までの3年間、いずれも羽田空港を発着する全日空のパリ、シャルル・ド・ゴール空港直行便を利用した。成田空港、日本航空の利用も検討したが価格と利便性からこの選択が最適と判断した。出発は各年とも8月最終の土曜日とした。全行程向井と鬚谷が引率した。2年目は玉利、3年目は海老名がそれぞれ加わり、3名体制で引率した。

出発当日、羽田空港では旅行会社担当者から、チェックインのサポートを受け、シャルル・ド・ゴール空港到着時には、旅行会社の現地スタッフの出迎えを受け、そのままチャーターバスでホテルまで移動した。ホテルにチェックインし、旅行会社担当者から現地の治安状況等の最新情報を聞いた後、近隣の商業施設や営業時間を実際に歩いて確認し、買い物や飲食の際の諸注意を受けた。

翌日の日曜日をベルサイユ宮殿とパリ市内観光に充て、集中講義に向け、現地の時間で生活し現地に慣れるよう努めた。観光はチャーターバスを使い全行程日本人女性ガイドの案内で廻った。年度により順序が前後したが、ベルサイユ宮殿、ルーブル美術館、凱旋門、エッフェル塔等を訪ねた。特にベルサイユ宮殿、ルーブル美術館ではガイドによる詳細な解説が好評であった。

３－２．集中講義（前半：デザイン発想法）

月曜日から毎日8時間(9:00-13:00,　14:00-18:00)の授業を受講した。前半はデザイン発想法の授業で、担当はグレゴリー教授、通訳には現地在住の服飾の専門知識を持つ日本人女性があたった。まず、ピックアップされたデザイナーの作品から、着目すべき視点、特徴、作風、デザイン画の心得等を聞いた。次にオリジナルデザインをコラージュの技法によって作り上げる方法を学んだ。デザインソースは販売中の雑誌等とされ、まずは雑誌を市中のスタンド（駅の売店のような店が随所にある）で求めるところからはじめた。写真のプリントアウトやカラーコピーを駆使し、サイズを整えて画像を合成して提案資料を作成した。

初年度と2年目はワンピースを、3年目は2人1組でトップとボトムに分かれてデザインを行った。指導は教員が一人ひとりを巡回し個別に助言する形で行われた。指導も丁寧であると同時に、通訳のレベルが非常に高く、学生は全くストレスなく教員の指導を受けることが出来た。グレゴリー教授は3年間継続して担当された。

集中講義期間、毎日13時から14時が昼食休憩となったが、外に出かけて食事を取ることは時間的に難

しく、学生のストレスや事故の原因になると考えられ、和風の弁当を手配した。初年度より好評で、3年間このスタイルを踏襲した。

３－３．集中講義（後半：ドレーピング）

後半は集中講義3日目の午後から始まり、前半のデザイン発想法で完成させたデザインを、ドレーピングによりトワルに作り上げる技術を学んだ。担当は2016年度がクリスタル教授、2017、8年度がパトリス教授、2018年度は参加者が多かったためマルレーヌ教授も加わった2名体制で行われた。教員が2名の時間は通訳も2名で対応した。

授業はステップごとに教員が学生を集めて詳細に解説しながら模範の手技を見せ、各自がそれぞれのデザインに沿って作業を進める形で行われた。ドレーピングは本学の服飾造形学科（類）では2年生後期から開講されており、2年生には初めての経験となった。一方3年生以上は本学の授業を受講しており、日仏の技術の同異も学ぶことが出来た。

前半のデザイン発想法は受講生全員にとって初めて経験する分野であったが、ドレーピングは学年により経験値が異なったため、トワル制作の進捗速度に差が認められた。しかし、各自が作業を行っている時間、教員が徹底して学生の個別指導を行ったことで、学生は経験に依らずにそれぞれの進捗に合わせて技術を修得することが出来、高い満足度に繋がった。最終日にサンディカ校校長より、全員に修了証書が授与され、集中講義を終えた。

３－４．復路

金曜日に集中講義を終え、土曜日は終日自由行動とし、学生は思い思いにパリの休日を楽しんだ。夜には、参加学生、教員、通訳の全員で夕食会を開き、懇親を深めた。

翌日曜日は、朝からチャーターバスで旅行会社現地担当者の案内でモネのアトリエのあるノルマンディー地方のジベルニーに向かい、モネのアトリエと庭園を鑑賞し、食事や買い物などを楽しんだ後、シャルル・ド・ゴール空港へと移動した。空路帰国し、羽田空港では旅行会社担当者の出迎えを受け、全員の無事を確認し解散した。

４．帰国後

４－１．体調不良・事故

幸い、３年間を通じて、スリ、ひったくり、盗難、また学生が危険な目に遭う事件･事故はゼロであった。安全最優先の行程設計と事前の徹底した注意喚起が功を奏したものと考えている。現地での体調不良については、講義期間中に頭痛、腹痛などを訴えホテルで半日程度休養を取ったケースが３年間で３件あったが、いずれも医療機関の受診には至っていない。

2016年度には復路で軽度の発熱の症状が認められた学生が1名あったが、帰宅後問題なく軽快した。2018年度には復路の航空機内で1名の学生が貧血様の体調不良を訴え、機内で客室乗務員に介護された。羽田到着までには回復し、念のため学生の自宅最寄り駅まで送り届けたが、帰宅後は問題なかった。

４－２．反省会

毎年度、帰国後に参加学生に対して後述するアンケートを実施し、秋に齋藤客員教授を招いて反省会を開催した。反省会では、全参加学生に今回の成果、課題、今後への抱負等を発表させ、研修を締めくくっ

た。併せて齋藤客員教授、向井、髮谷でも次年度への改善点などを話し合った。

議論の中心は研修内容のスコープとレベル、また事前学習と研修本番のより高度な連携についてであった。この議論から、事前学習が毎年充実し、現地での高い満足度の維持に寄与していると考えられる。

４－３．サンディカ校教員の来学

2017年12月サンディカ校、グレゴリー教授の来日に合わせて、本学に招き、それまでの参加学生と共に昼食会を開催し、学内を案内した。サンディカ校からも教員を招くことが出来、協定校として相互交流を実現できた。

５．アンケート

毎年度帰国後､参加学生に一定の設問についてアンケート調査を行って､本研修の適切性や満足度を測った。結果を以下のグラフ（設問１から設問13）で示すとともに課題や評価を示す。

まず、設問１で成績配布や入学式の保護者説明会等の学科(類)で集まる機会での告知が、企画を知る機会になっていること、設問２で海外での研修は初めての学生が大多数であることが分かった。参加費用の準備の問題もあり、保護者への早期の告知は重要であると考えている。

続いて設問３～６の授業内容について問うたところ、まず希望する分野を希望する水準で受講できたこと、教授方法にも概ね満足していることが分かる。この満足度をさらに向上させるためには、対象学年やスキルレベルを揃える必要があると考えられ、経験の異なる学生を参加させ、限られた短い時間での実施であることを考慮すればこの結果は本企画の目的を十分に達成していると考えられる。2016年度(初年度)で期間が短いと感じている学生が５割居ることと、サンディカ校から期間の延長の打診があったことで、2017年の計画段階で授業時間の増加を検討したが、費用の面から５日間を踏襲すべきと判断している。

設問７の研修参加への満足度では、非常に高い満足度が示されており、全ての年度で100％肯定的な回答があった。設問８の視察・観光のボリュームではもう少し増やして欲しいという希望が伺える。設問９のホテルのグレードは極めて適切な選択であったことが分かる。

設問10以降は事前課題の設定と指導について問うており、事前課題がサンディカ校での授業を有意義なものにするために非常に重要であったことが示された。事前課題を本学の学生の習熟度に合わせて実施したこと、解説・指導と学生の制作物の点検に分け丁寧に行ったことで、学生の研修への意識醸成と共に実際の技術と知識の確実な習得に繋がったものと考えている。

６．総括

以上述べた通り、服飾造形学科(類)向けに短期海外研修を企画実施した。全行程ホテル8泊機中１泊で延べ１０日間の内５日間を集中講義に充て、ベルサイユ、ルーブルなどの視察・見学も含めた。

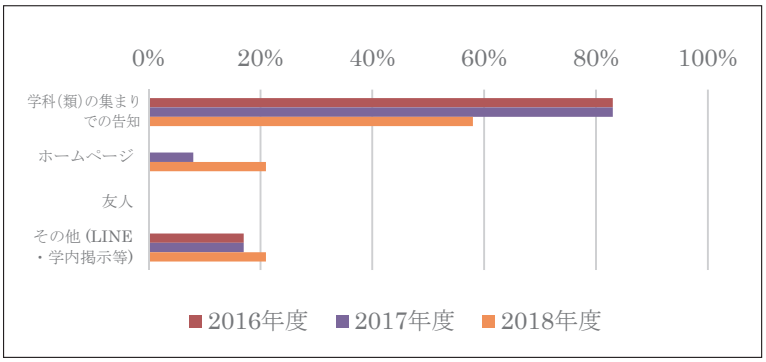
サンディカ校と綿密に打ち合わせて、研修の主眼をデザイン発想法とドレーピングに限定し、個別指導を中心とした授業で学生から高い満足度を得た。

謝辞

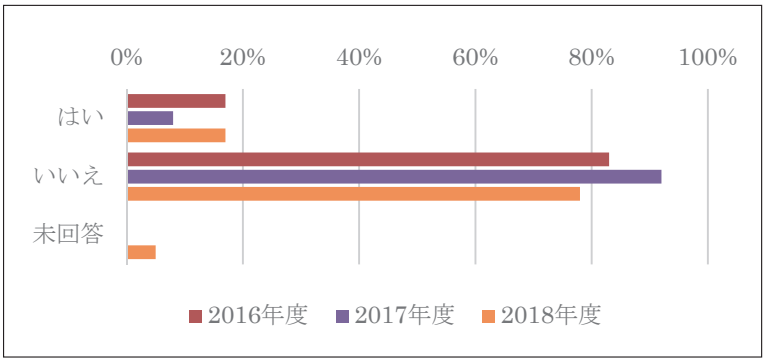
本企画を実現するために、岸田学長、金子副学長、柳沢家政学部長、服飾造形学科関係各位、国際交流センター、研究支援課をはじめ各部局の方々にご支援を頂きましたことに深く感謝申し上げます。

Supplementary material

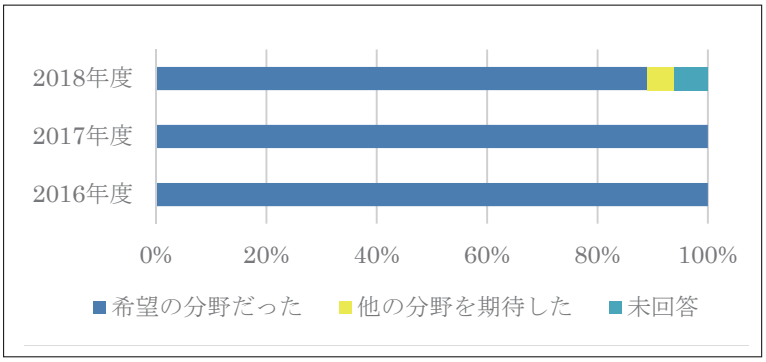
実際の研修の様子を把握出来るように、研修の際の写真を付記する。



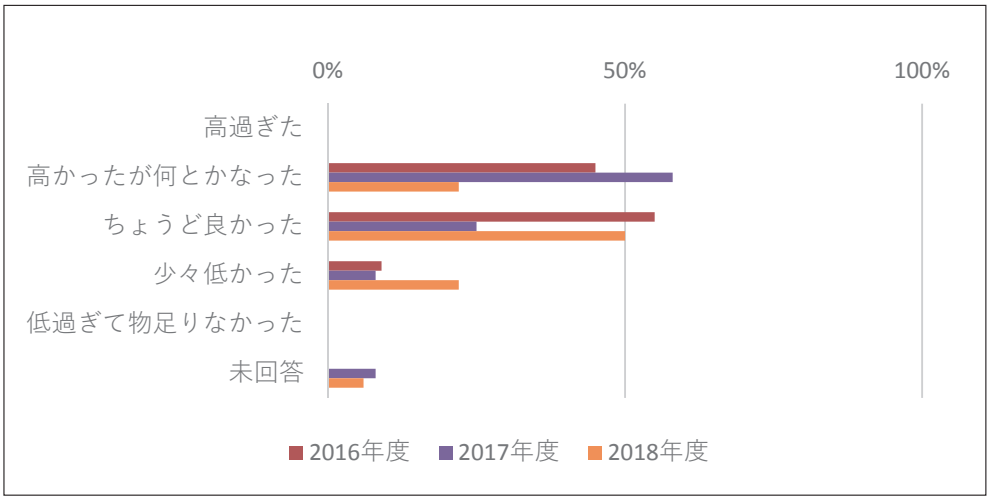
設問１．どうやって海外研修の事を知りましたか



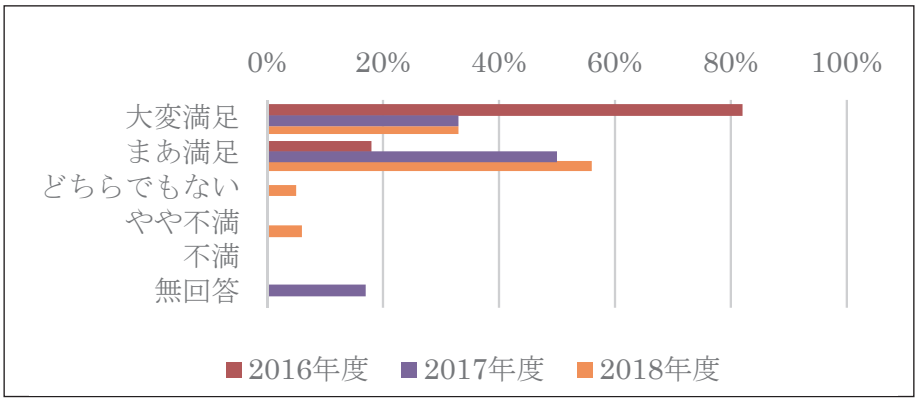
設問２．以前に何らかの海外研修に参加した事はありますか



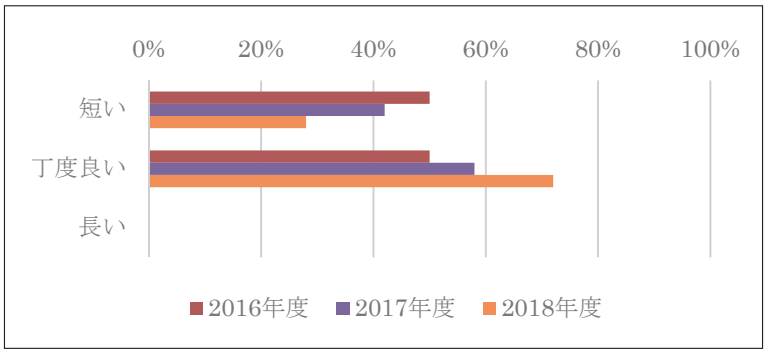
設問３． 研修で取り扱った分野・テーマ（デザイン発想・ドレーピング）について



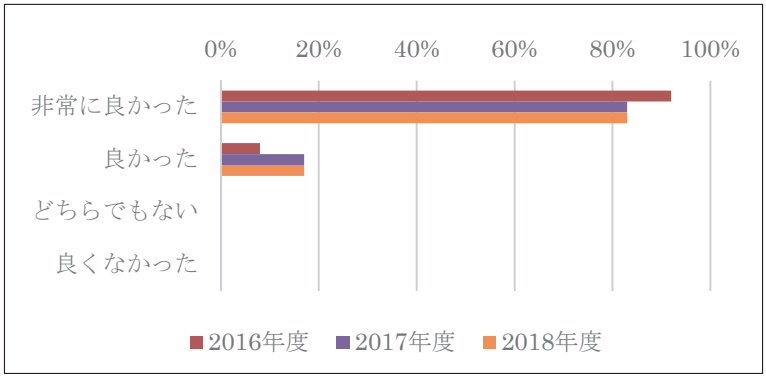
設問４． 研修内容のレベルについて



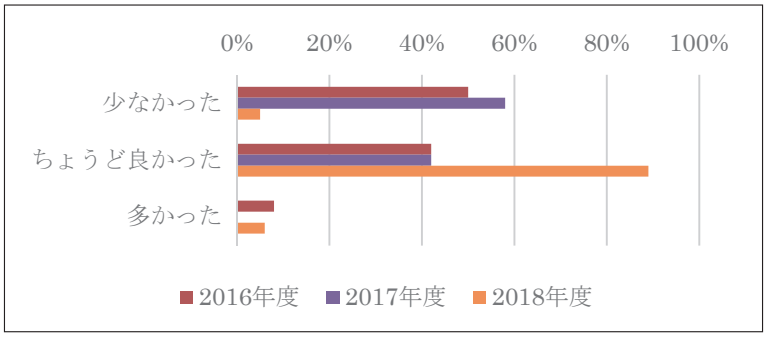
設問５．サンディカ校の教員の教え方について



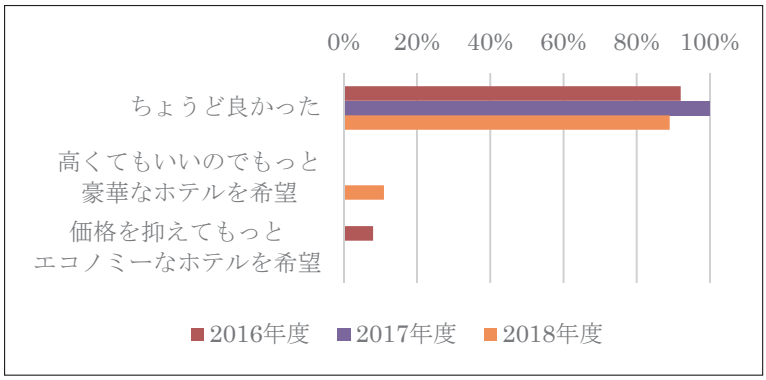
設問６．研修時間（１日８時間×５日間）について



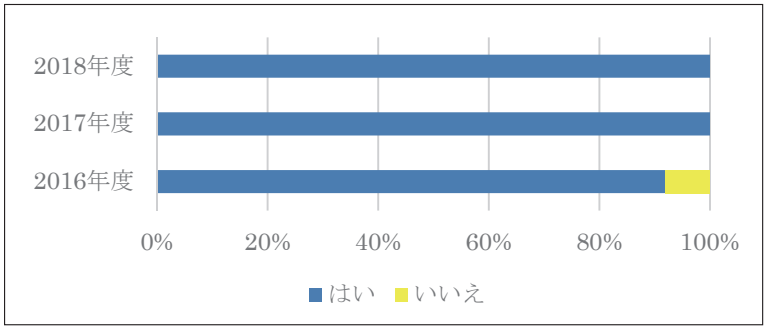
設問７．参加してよかったですか



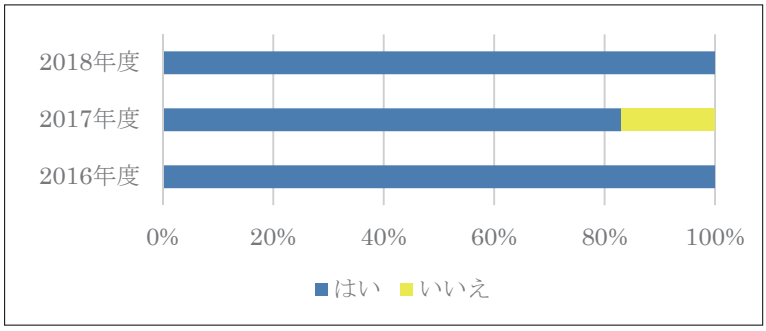
設問８．視察・観光（ベルサイユ、ルーブル、ジベルニー、展示会など）について



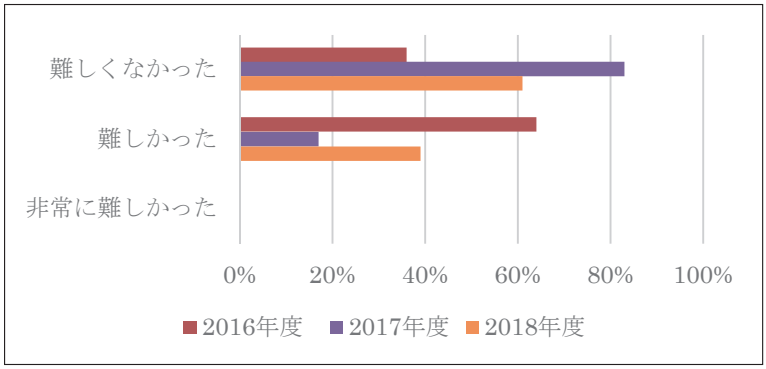
設問９．ホテルのグレードについて



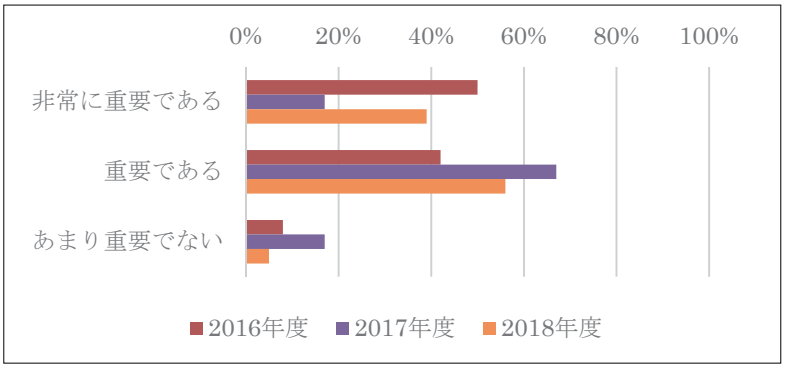
設問10．事前課題は自分の意欲を向上させるために役立った



設問11．事前課題によって現地での研修が充実した



設問12．事前課題の難易度は



設問13.　出発前の課題点検は

Supplementary material

鬚谷　　要（和洋女子大学 全学教育センター 教授）
向井加寿子（和洋女子大学 服飾造形学科 元准教授）
海老名理紗子（和洋女子大学 服飾造形学科 助手補）
玉利　舞花（和洋女子大学 服飾造形学科 助手補）

（2019年10月８日受理）